

統計で問い直す

はずれ値だらけの

日本人

本川裕

日本人は、わかりにくい。だからこそ机上の空論ではなく、

統計二筋
50年以上！

伝説の統計サイト
『社会実情
データ図録』
管理人が、
混迷する
世界に、
日本人の「風変わりさ」の価値を問う！

統計データで
日本人を語る！

統計で問い直すはずれ値だらけの日本人

本川裕

星海社

340



SEIKAISHA
SHINSHO

統計モラリストになるまで

データに基づいた合理的な行政の道具としてだけでなく、人々が自分や自分が属する社会を知るための道具としての統計の役割がますます重要となっている。統計は手段というよりそれ自体が目的とさえいえるようになっていくのではないだろうか。

自分を知るとというのが統計の大きな役割だといえるが、統計リサーチには、研究一般と同様に、仮説検証的な方法と発見的・探索的な方法とがある。学術論文に統計データが使われるときは、先人の研究をもとに新しい仮説を立て統計で実証するという仮説検証的な方法で統計が使われる場合がほとんどである。

私の仕事はそうした方式ではなく、むしろ大好きな統計データからいろいろ教えてもらうという意味で発見的・探索的なリサーチである。そしてデータによって観察・発見したことを矛盾なく説明できる包括的な結論を考えるのである。学術論文にはあまり適してい

ない方法であるが、研究のたつぽ化やマンネリ化を打破するには有効と考えられる。

私は自分を「統計モラリスト」と考えている。

モラリストとはここでは道徳家という意味ではなく、ナチュラリストと対になる言葉である。ナチュラリストは博物学者とも訳されるように、自然主義者というより昆虫採集マニアなど積極的に自然に親しんで自然の動植物を観察・発見・分類する人を指す。進化論で有名なダーウィンももとは生物学者というよりは自然観察家であるナチュラリストの一人だった。同じようにモラリストは道徳主義者というより、モンテーニュ、パスカル、ゾラなど現実の人間の習俗を観察し、人間性を洞察する作家や思想家を指す言葉である。ここでモラルとは習俗、人間の興味深い生態のことを指す。「私が猫と戯れているとき、ひよつとすると猫のほうが、私を相手に遊んでいるのではないだろうか」というモンテーニュの観察もモラリストならではのものだろう。私は統計で人や社会の生態を観察する統計モラリストだと考えているわけである。

私は農業経済という学問分野を大学、大学院で専攻した。農業分野は、農家や農地、作物、家畜かちくなどの統計調査が数多いことで知られており、農業を勉強するため統計表を見る機会が増えた。

今のようにインターネットが発達していなかったので農学部の開架式図書館で統計書を調べるが多くなった。そのうちに農業統計だけでなく、国勢調査やその他の各種の統計調査についてもこんな調査をしているのかと「面白いなあ」と思っている。いろいろと統計書を調べてみるのが趣味になった。統計書は、今と違って結果がグラフになっていたりすることは少なく、数字自体が表になって並んでいるに過ぎないので、普通に考えれば、面白い筈はない。ただ、私の場合は、女性の20代前半の未婚の女性が3、121、468人（昭和50年国勢調査）だというような数字を見ると、私と結婚するかもしれない適齢期の女性が、こんなに巨大な人数いるんだと妙に数字にコーンした。こうして統計マニアになっていた。

かつて経済系シンクタンクの老舗として国民経済研究協会という財団法人があった。大学院生だった私は、農村調査に馴染みがあるということで、ここが行っている高速道路や本四架橋の影響調査に駆り出されることになった。

このシンクタンクはのちに産経新聞の社主にもなった稲葉秀三という人が戦後すぐにつくった研究機関である。彼は、第2次世界大戦の際に、日本の国力に関する各種データを使った率直な調査を行い、日本が勝つのは難しいという結果を得た。ところが、これが軍

部に嫌われて投獄された経緯から、データを軽視した予測や計画はろくなことになる
との確信を持ち、これを示すために設立したのが国民経済研究協会である。そのためか、
この研究所は統計書を定期的に、かつ網羅的に入手し、戦前を含め過去のものも、たくさ
ん所蔵していた。地価の高い青山あおやまタワービルのワンフロアに研究所はあったので、今から
考えると、もったいない話だが、研究員の研究スペースに匹敵するひつてきぐらい統計書の所蔵ス
ペースがあった。

こりゃあいいや、と私は思った。この研究所に行って仕事をしていると、すぐ近くで統
計書を見放題なのだから私の趣味にぴったりだ。そこで、いくつもの調査のお手伝いを長
くするようになった。当時の学生運動のせいもあったのだが、いつしか大学の先生になる
という考えは頭になくなり、こうした統計書に囲まれて仕事をしていきたいと思うようにな
った。そしてその研究所の研究員になった。研究所の仕事は、大きく、経済予測と受託
研究の2種類からなっていた。私は受託研究の方の部署に所属していた。自治体や官庁な
どから調査を依頼され、文献調査、現地調査、アンケート調査、統計データによる調査を
組み合わせて、報告書を作成するのが仕事だ。

シンクタンクでの仕事で行政の道具として統計を扱うことが多かったのだが、2004

年にこの研究所が解散となった後は、「社会実情データ図録」というサイトを立ち上げ、今年では、自分たち日本人はどんな生き方や考え方をしているのかを観察する統計モラリストとしての仕事を中心になっている。統計が発達し、その結果をネットで知ることができるという恵まれた環境ならではの有意義な楽しみが生まれているのである。

分野を問わず統計データを涉^{しやうりよう}猟する統計モラリストとしての仕事の中で気づいたことがある。国際比較データで日本や日本人が世界の中で非常に特異な傾向を示すものが多いという点である。

本書への導入部ともなることから実例を挙げよう。

日本では他国とは逆に「できる子」、「恵まれた家庭の子」がいじめにあいやすい

15歳の学校生徒を対象にした国際的な学力調査として関心が高いOECDのPISA調査では、学力テストに合わせて、就学上の状況の調査として、学校生活や生徒の意識について直接生徒に聞く調査を実施している。2015年調査で取り上げられた「いじめ」についての調査結果を見ていて、日本のいじめが特異なことが分かった。

いじめを受けやすいのがどんな生徒かについての集計結果を見ると、日本は、他国よ

り社会分断的でないという特徴が見て取れる。

まず、いじめられるのが勉強のできる子なのかできない子なのかを見てみよう。このため、**図1**には、PISA調査の本体部分である**学力テストの結果**と付帯部分である**いじめとの関係**を主要国について示した。

図には科学的リテラシーのテスト結果の得点を低い方から高い方へ人数別に10区分した各区分の生徒について、過去1カ月の間にいじめを受けた割合を示した。

各国の結果を見ると、「からかい」、「こづきまわし」、「悪いうわさ」といったいじめの種類によらず、概して、成績の悪い生徒ほどいじめを受ける割合が高いことが分かる。

日本の結果を見ると、対照的に「からかい」と「こづきまわし」では成績の良い生徒の方がいじめにあいやすい。「悪いうわさ」については、成績の悪い生徒ほど比較적인いじめを受けやすい傾向にはあるがその程度は他国と比べてそう高くない。

どの国でも、いじめの中で最も多いのは、実は、「からかい」であり、日本では特に多くなっている。「こづきまわし」は、一般的にはそう多いいじめではないが、日本の場合はいじめの種類としては2番目に多くなっている。この2つのいじめの結果から、日本のいじめの特徴は、他の先進国とは逆に成績の悪い生徒より良い生徒がいじめられやすい点にあ

過去 1 カ月の間にいじめを受けた生徒の割合

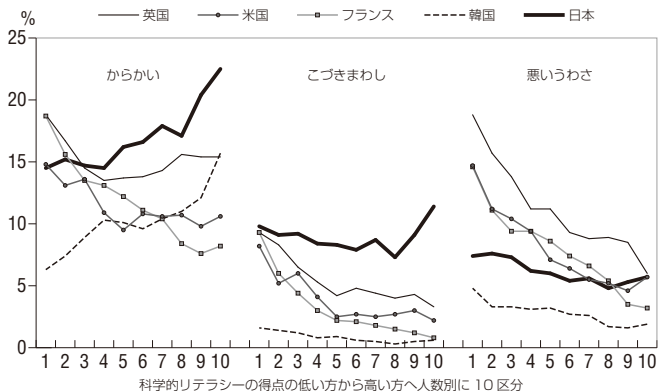


図1 いじめを受けやすいのは勉強のできる子かできない子か

注：いじめについては15歳（日本では高校1年）の生徒の自己申告による。項目名の英文は以下の通り。

からかい（Other students made fun of me）、こづきまわし（I got hit or pushed around by other students）、悪い噂（Other students spread nasty rumours about me）。

資料：PISA 2015 Results VOLUME III STUDENTS' WELL-BEING, Table III.8.4

過去 1 カ月の間に何かのいじめを受けた生徒の割合（OECD 諸国）

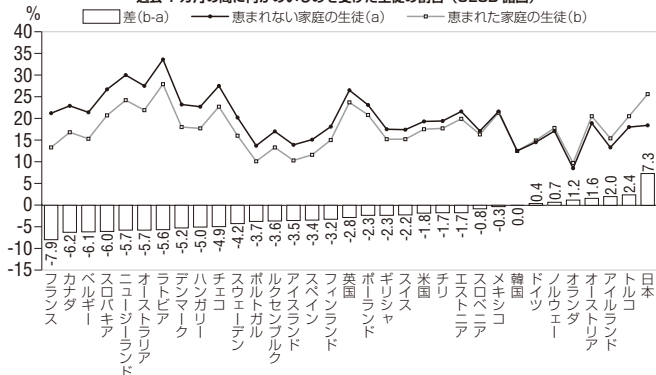


図2 恵まれた家庭かどうかによるいじめを受ける生徒の割合の違い

注：いじめについては15歳（日本では高校1年）の生徒の自己申告による。恵まれているかどうか（socio-economically advantaged or disadvantaged students）は、両親の教育水準、職業上の地位、資産保有（蔵書数を含む）から算出される指標で測られ、ここでは下位4分の1と上位4分の1の生徒を、それぞれ、「恵まれない家庭」、「恵まれた家庭」としている。

資料：PISA 2015 Results VOLUME III STUDENTS' WELL-BEING, Table III.8.4

ると結論づけられよう。

次に、いじめと家庭環境の関係を見てみよう。

図2には、OECD諸国の中では例外的といつてよいのであるが、日本が、恵まれた家庭の生徒ほどいじめにあっていないことを示すデータを掲げた。

OECD諸国の中では、恵まれない家庭の生徒の方がいじめにあう割合が多い国が33カ国中25カ国と多くを占めている。その差が最も大きな国はフランスである。他方、日本は、恵まれない家庭の生徒が1カ月の間に何らかのいじめにあう割合は18・4%であるのに対して、恵まれた家庭の生徒は25・6%とこれを大きく上回っており、その差はフランスとは逆の方向で最大である。欧米では家庭が貧しい子ほどいじめられるのが一般的であるのに対して日本では裕福な家庭の子ほどいじめられているというのだから実に対照的である。

一般に勉強のできる生徒は家庭環境が恵まれている生徒であろうから、先ほど成績でいえたことは家庭環境でも成り立つと考えられるが、それが、データで実証されている格好である。

日本の学校では、勉強のできる子や恵まれた家庭の子に対するやっかみや足を引っ張り

たい気持ちが強くなっているといえる。日本人に特徴的な「和をもって尊しとなす」精神が暴走した結果だともいえよう。

風変わりな日本人の存在意義とは

このように、はじめの国際比較データを見ると日本の状況は世界的な一般傾向からの著しい乖離かいりが認められる。私の経験では、はじめに限らず、国際比較データでは、日本は世界の常識が通じないことが多く、そうしたデータのよって立つところが探求できれば、日本人の自己認識を深めることができるという意味で、興味深さもまたひとしおである。

本書は、国際的な実態調査や意識調査の中で、私がこれまで遭遇した風変わりな日本人を示すデータの中から主要なものを選び、それを分野別に並べ、そうした日本人の特性が生まれた背景を探求する中で、全体の脈絡もできるだけ明らかにしようとしたものである。その際、単に日本人が風変わりであることを知る興味深さに満足せず、それが大袈裟に言えれば人類にとってどのような意味をもつのかを考えた。

結論は終章を見ていただきたいが、世界の一般傾向とはかけ離れた日本人の特異な意識や実態は東洋古代に淵源えんげんするものが多く、人類の将来にとって極めて有意義な内容を含ん

でいると思っている。論旨には、統計モラリストの勝手な思い込みの部分も多いとは思いますが、個別のデータの興味深さには自信がある。本書を気軽に読んでいただき、何事かに気づいていただければ幸いである。

なお、各章末には、紙面の関係でその章でふれられなかった統計データなどについて、私の統計グラフサイト「社会実情データ図録」の**参照図録番号**を掲げておいた。興味のある方は、トップページの検索窓にこの番号を入力し、本文を補完する情報として活用していただきたい。

2025年5月 本川裕

目次

まえがき 3

第1章

日本人の实力はいかほど

18

1-1

ジャパン・アズ・ナンバーワン…経済と寿命 20

1-2

世界一めざましく身長が伸びた日本人 27

1-3

働き者の日本人…かつては労働時間、今は高齢就業 36

第2章

しみこんだ日本人の省エネ体質

52

2-1

スリム体形世界一の意外な理由 54

2-2

少食ニッポン…先進国中、カロリー摂取量最少って本当？ 68

2-3

「お酒を飲むことが悪いとは思わない」人が世界一多い 82

2・4 日本人は最も眠らず、また最もセックスしない国民?! 90

第3章

日本人のパッシブ志向を示す
いくつものデータ 104

3・1 世界一失敗を恐れる日本の中学生 106

3・2 人生が自由にならないのを何故日本人は嘆かないのか 112

3・3 マスコミを信頼しすぎて不安をぬぐえなくなる日本人 121

第4章

信じるのはちがう！
信じないのもちがう！ 136

4・1 日本人は無宗教のようでありながら霊的な宗教心は世界一 138

4・2 神を信じるか…日本人が奇妙なのか、それとも世界の人々が奇妙なのか 144

第5章

風変わりな男と女の国

158

5-1

日本人の夫婦の稼ぎ方と家事の分担はともに世界一「特異」160

5-2

一見すると日本人の夫婦関係が世界一良好…しかし実態は170

5-3

日本人は世界一未婚の母が少ない国民…しかし何故？183

第6章

政治や国家、敬してこれを遠ざく

190

6-1

日本人ほど政治や国家に疎遠な気持ちを抱く国民はない192

6-2

何と日本人は世界で一番政府に社会保障などを期待していない197

6-3

日本の公務員数が世界最少レベルである理由は？206

第7章

世界とのズレが大きい「日本人の常識」..
じつは未知の可能性

216

7・1 日本人が自然や環境を世界一大切に思うようになった理由 218

7・2 女性、高齢、低学歴の方がネガティブにならない世界でもめずらしい国

230

7・3 文明の対立を日本人の「思いやり」で救えるか 241

おわりに
261

第1章

日本人の
実力はいかほど

1965 1970 1975 1980 1985 1990 1995 2000 2005 2010 2015 2020

1950 1965 1970 1

これから、日本人が世界一風変わりな国民であることを示すデータをいろいろ紹介し、それが日本人に対して、また世界の人々に対しても示唆している意味を考えていこうとするにあたって、まず、第1章では、国民性というより所得水準、平均寿命、平均身長、労働時間、年齢別就業率といった実態的なデータから、日本人の実力的な側面を確認していこう。経済力トップの座からは退いたものの、長寿命トップ国として、米国の「太く短く」ではない「細く長く」働く能力という点で実力は衰えていない。「いわれなき自信喪失からの回復」がなお日本人にとっての課題であることを示すことになる。

5 2010 2015 2020

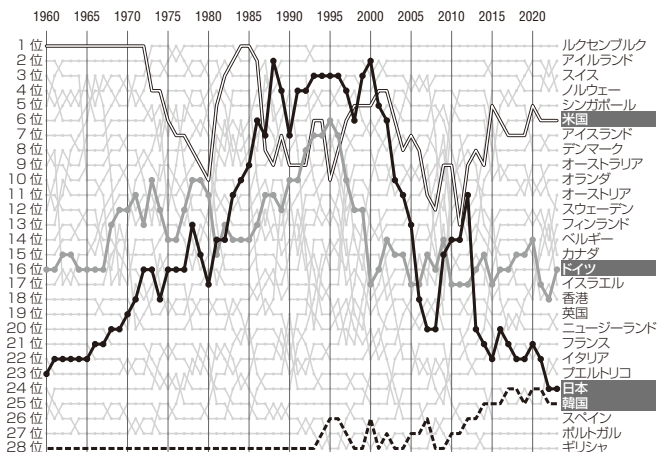
1-1 ジャパン・アズ・ナンバーワン…経済と寿命

失われた日本の経済ナンバーワン

主要先進国について、経済水準の代表的な指標である1人当たりGDPと厚生水準の代表的な指標である平均寿命の世界ランキングの推移を図1-1-1に示した。ランキングの対象国はIMFが先進国として認めている国のうち継続的にデータの得られる28カ国である。結論を先取りして言うと、経済と寿命のナンバーワンが日米で真逆となっている点が印象深い。

1人当たりGDPは、IMFデータを参照するのが一般的だが、それだと1980年以降の値しか得られないので、ここでは経済発展と寿命の関連を追うため日本の高度成長期を含む1960年からのデータを世界銀行のデータベースであるWDIにもとづいて示した。平均寿命の推移については1人当たりGDPと同じ諸国について、2年ごとに改訂版が公表される国連の人口推計データにもとづく男女計の過去実績ランキングを掲げた。

1人あたりGDPランキング (為替レート・ベース)



平均寿命ランキング

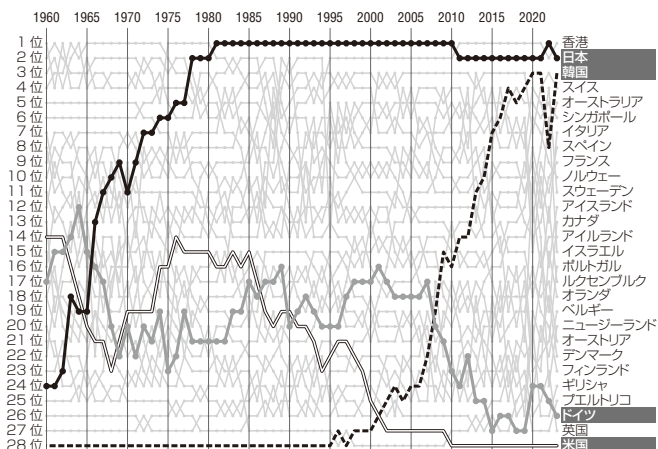


図1-1-1 "ナンバーワン"から転落した日本経済、トップレベルを維持する日本人の平均寿命
注：IMFのデータベースの先進国41カ国のうち全期間のデータが揃わない国を除く28カ国が対象。
資料：1人あたりGDPは世界銀行 world Development Indicators、平均寿命は国連人口推計2024

2024年9月に行われた自民党総裁選の立候補表明で、総合的な国力の強化が必要だとした上で「経済成長をどこまでも追い求め、日本をもう一度世界のとっぺんに押し上げたい」と述べた保守派を代表する高市早苗候補たかいちさなえが、中高年男性が多い自民党員の支持を集め1回目投票で首位に立った。しかし、国民の一部にしか受けないこのような過去の幻影を信条としているようでは次の衆議院選挙で勝てないと思なされたため決戦投票で石破茂候補に逆転で敗北した。

米国の社会学者であるエズラ・ヴォーゲルが著した『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が1979年に出版され、日本でベストセラーとなった時期、確かに日本経済は世界でもまれな高度成長の成果として人口1人当たりのGDPも世界トップへ向かって邁進していた。そしてバブル期に入って、ドイツや米国を抜き去り、小国を除き、ついに事実上世界ナンバーワンの地位に就いた。

ところが、21世紀に入ってからの一気のランキング低落は印象的である。最近の1人当たりのGDPランキングは24位と1960年代の高度成長長期初期の水準にまで落ち込んでいる。もちろん円安の影響でもあるのだが、長期低落は明らかだろう。

こうした動きを反転させ、「もう一度世界のとっぺんに押し上げる」と言うからには、何

をすればそうなるという具体的根拠を挙げなければ、保守層の共感を得るため「大いなる幻影」を追っているだけと見透かされよう。

長寿ナンバーワンを長年継続する日本

ところで、経済成長とともに保健医療、栄養、インフラが充実し、その結果、人々の厚生水準は上昇する。厚生水準の代表的な指標は平均寿命である。日本の平均寿命のランキングは、経済の高度成長期の成果として、1980年代には世界ナンバーワンに躍り出た。韓国も近年経済成長とともに1人当たりGDPのランキングが上昇し、日本をもうすぐ追い越しそうな勢いであるが、平均寿命の方はすでに経済成長の成果として、急速にランキングを上昇させており、今や世界トップレベルとなっている。

日本の動きが驚異的だと思われるのは、ナンバーワンに躍り出たことより、むしろ、経済のランキングがどんどん落ちていっても厚生水準を示す平均寿命のランキングでほぼ世界ナンバーワンを維持し続けている点である。

上で引いた保守派候補の立候補宣言は、したがって二重の意味で見当違いだと言えよう。すなわち経済のてっぺんを再び実現するというのは幻影だという点がひとつ。そして二つ

目は、日本は経済にしてもそれが目的の厚生水準ではてっぺんを維持しているという認識が薄い点である。

一方、図で、もうひとつ印象的なのは、米国の動きである。米国は経済のナンバーワンの地位を少なくとも小国を除く主要国の間では維持している。米国は世界の中でてっぺんの経済の国なのである。ところが平均寿命のランキングでは、もともと高いランクにはなかったが、今や、主要な先進国の中で最低の地位（すなわち最も寿命の短い国）を継続しているのである。経済でトップの国が厚生水準で最下位の国なのである。すなわち日本と米国はこうした点で真逆なのである。とんでもなく皮肉な状況であると言わざるを得ないだろう。

こうした日米の平均寿命推移の差をもたらしている健康リスクの状況を種々の要因で調べてみると、日本は塩分過多など一部を除いて、食生活関連リスク（肥満リスクを含め）や環境面を含むその他のリスクを注意深く回避しているため（**図2-1-5**参照）、世界トップレベルの平均寿命を維持し続けている一方、米国は、食生活、アルコール、薬物などでリスクを高め、あるいはリスク回避より経済を優先しているため、平均寿命最下位の地位に甘んじざるを得ない状況になっていることが分かる。

言い換えれば、日本人のモットーは「細く長く生きる」であり、米国人のモットーは「太く短く生きる」であると捉えられよう。

経済も寿命も両方ナンバーワンを維持するのは無理なのであり、経済ナンバーワンを目指すならせいぜい米国に近づくしかないが、そもそも日本の保守層に寿命を犠牲にして経済ナンバーワンを目指す覚悟があるとも思えない。

日米以外の先進国の代表としてドイツの推移を細めの黒線で示したが、ドイツは日本と米国の中間的な地位、それも米国に近い地位を占めてきていることが分かる。

豊かさで長寿は選択の時代に突入？

もうひとつ気になる点がある。

かつての日本や近年の韓国のように経済発展が寿命の伸びにむすびついてきた時代は、少なくとも先進国の間では、日本と米国の逆行現象ぎやうしょうにみられるように過ぎ去ってしまったのであろうか。

この点を確認するため、21頁の図のランキング・データを使って、1人当たりGDPランキングと平均寿命ランキングの相関係数の推移を図1-1-2に掲げた。

1970年代まではおおむね相関係数が0・5を超えており、かつては経済水準と厚生水準が並行的だった。ところが、今では両者の逆行的な側面によって打ち消され、相関係数がゼロに近づき、マイナスとなる年次もあらわれている。すなわち両者の相関が見られなくなっている。新型コロナウイルスの世界的流行で2020～22年には、おそらくワクチンの調達なども経済力が左右したのだろうか、経済と寿命の相関が一時復活したが、23年には、再度、長期傾向に戻った。

経済の発展水準が一定レベルを超すと寿命までもが法的なものから選択的なものに変化していると言ってよいのかもしれない。寿命を伸ばすことは人類の夢であり、経済発展の追求もそのためだったのであるが、最近、物的な豊かさ^{ぜいたく}と長寿について、どちらかを選ぶという究極の贅沢^{ぜいたく}をする文明の段階に突入したのか

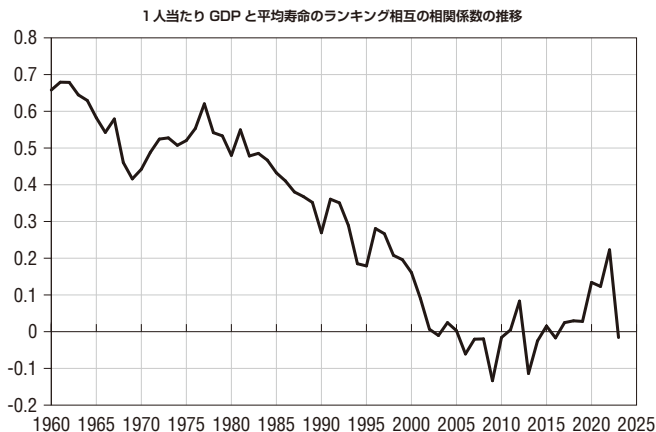


図1-1-2 経済発展と寿命の長さは並行的か逆行的か

注：IMFのデータベースの先進国41カ国のうちデータが揃わない国を除く28カ国が対象。

資料：1人当たりGDPは世界銀行World Development Indicators、平均寿命は国連人口推計2024

もしれない。前述の日米のランキング逆転は、それを象徴する現象であるような気がする。

1.2 世界一めざましく身長が伸びた日本人

日本人が欧米人に比べ背が低いことは、経済成長に伴い栄養が改善されてかつてよりはずっと背が高くなった今でも、テレビで見る外国人、国内にいる外国人との比較で感じていることである。しかし、2024年シーズンに2年連続のホームラン王になるなど大リーグで大活躍している日本の大谷翔平選手は身長193cmであり、身長180cmと言われる元バスケット選手の妻真美子まみこさんとともに、テレビ映像で見る限り、米国人の同僚やその妻たちに体格で劣るところかむしろ凌駕りやうがしており、昔では考えられない状況だ。

そこで、日本人の平均身長とその変化が世界の中で有している位置についてデータで調べてみよう。

欧米とアジアの主要国について、18世紀末からの男性の平均身長の長期推移を図1.2.1に示した。時間軸は出生年代で示している。すなわち、その年代に生まれた者の成人平均

身長の推移で変化をあらわしている。ある時点の平均身長では、例えば、変化の激しい時代や国では、背が低かった時代の高齢者の身長まで平均値の対象となり、時系列比較や各国比較が難しくなる。そこで出生年代の身長で推移を追っているのである。最新の1990年代はほぼ現代の平均身長をあらわしている。

20世紀以降のデータ源は、肥満、喫煙など感染症以外の健康リスクについてのデータを分析することを目的としたNCD-RisC (Non-Communicable Diseases Risk Factor Collaboration) という国際共同疫学研究グループによるものだが、それ以前は種々の長期データ掲載サイトであるClio-Infraに依存している。

大きく過去にさかのぼったGDPなど長期的な経済発展のデータが各国について推計されているが、仮定に仮

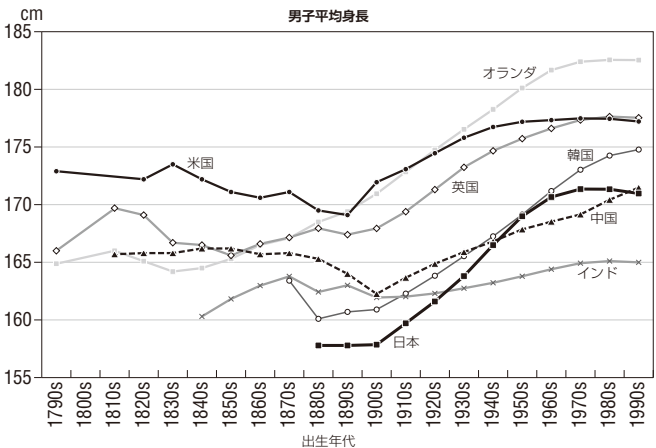


図1-2-1 主要国の平均身長の長期推移

注：1900s以降はNCD RisC, Human Height (2017)による。1990sは1990~96年平均。

資料：1890s以前：Clio-Infra, www.clio-infra.eu (2024.10.17)、1900s以降：Our World in Data

定を重ねたものであり、あまり信用できない場合もある。むしろ徴兵や囚人の生年・身長データなどの資料も活用した平均身長の長期推移の方が信憑性しんぴようせいが高く、長期的な経済発展の具体像を如実にうかがわせている。

対象国として、欧米は米国、英国、オランダを取り上げ、アジアは日本、中国、韓国、及びインドを取り上げた。

全体的な動きをおおまかにまとめると、19世紀中は経済不況や植民地化などの悪影響で身長の伸びは停滞していたが、20世紀生まれになると世界的に身長が伸びはじめ、第二次世界大戦前後から戦後生まれ世代にかけ経済発展の成果を享受するかたちで各国とも大きく身長が伸びた。もっとも20世紀末生まれにまで達すると国により身長の伸びが横ばいか短縮に転じる国も出ており、世界的な身長の伸びもそろそろ限界に達しつつある印象である。

そうした中、欧米諸国の方がアジア諸国より背が高い状況が長い間続いているが、最近では、アジア経済のキャッチアップとともに身長差も縮まっている。もっともインドについては経済発展の成果が身長にまで及ぶには時間がかかっている。

欧米諸国もアジア諸国も各国の間で平均身長のレベルと推移にそれぞれ特徴がある。

欧米諸国の動きの中で特に目立っているのは米国とオランダである。

米国は1880年代生まれまで世界一背が高かった点が印象的である。

米国はオーストラリアなど他の英領植民地とともに当初から非常に背が高かった(当節末の補論参照)。Clio-Infraの同じデータを分析しているOECD報告書(How Was Life? 2014)は実質賃金の高さを理由として挙げているが、これは未開拓地ゆえの生産性の高さにもとづく肉類などの安価で豊富な食料の供給を意味する。19世紀末までには、未開拓地の肥沃さが失われる一方で、イタリアなど背が低い南欧出身者の移民が増えたこともあって、身長は低下し西欧一般に近づいた。しかし、その後20世紀にはいると、栄養改善などの理由で他の欧米諸国同様、急速に身長が伸びている。もともと、近年は伸びが止まり、ヒスパニック系移民の増加、貧富の差の拡大、短寿命の要因ともなっている肥満、薬物などの非健康な社会環境でむしろ低下に転じている。

現在、世界一背が高いことで知られているオランダは、実は、19世紀には米国はおろか英国よりも背が低く、背の高さは大しかなかった。オランダの身長が世界一となった理由として、前記報告書は、高品質タンパク質がオランダのような人口密度の高い地域に大量に輸送可能となった技術変化を挙げている。しかし、同様の条件があてはまる地域

は欧州には他にもありそうなのに、何故オランダ人だけ背が高くなり続けたのかという疑問は消えない。戦後、オランダが他の欧米諸国を大きく身長で上回るようになったのは、栄養上の制約が取り払われて、恒温動物では寒い地域の方が体温維持の効率から体軀たいくが大きいというもとの遺伝的な特性（ベルクマンの法則）が顕在化したためと見てよからう。

日本ははじめから世界一背が低い国民として目立っており、幕末のペリー来航では、当時、世界一背の低い国民が世界一背の高い国民と出会ったのである。考古学的なデータから鎌倉時代や室町時代を経て江戸時代へと平均身長が低くなった推移が確認されており（**図1-2-2**参照）、日本人の当初の背の低さは遺伝的なものというより、限られた耕地を高度利用するため動物食を避け植物食に傾斜して人口を維持しようとした江戸時代の経済社会システムによるものだったといえよう。藩閥はんぼくごとの閉鎖社会で通婚圏つうこんけんが狭かったため雑種強勢ざしゅきやうせいが働いていなかったためという説もある。

その後、明治生まれまでは身長が停滞していたが、大正生まれの1910年代以降、急速に身長が伸びはじめた。図からもうかがえる通り、近代化に伴う日本人の身長の伸びの大きさとスピードは世界的にも類を見ないめざましい実績であるが、経済発展、栄養改善だけでなく、国内的にも対外的にも開放経済へ移行し、江戸期特有の制約条件の除去が重

なった結果と捉えられよう。

これに対して、19世紀には欧米並みに背が高かった中国では19世紀末～20世紀初頭生まれの平均身長が一時低くなってきている。この点に当時の社会経済状況の厳しさを見て取ることが可能である。これはおそらくアヘン戦争（1840～42年）、日清戦争（1894～95年）などの清朝末期から20世紀前半の日中戦争までの時代に、欧米列強や日本の植民地支配にともなう混乱や戦火が続いていたためであろう。独立後の経済回復、1920年代生まれからは戦後の経済発展により身長が顕著に伸びはじめ、今では停滞に転じた日本を抜くまでに至っている。

日本に続き、中国に先行して経済発展と身長の高

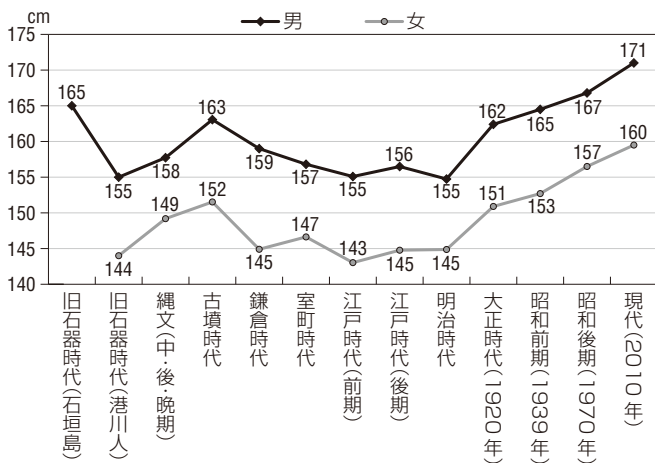


図1-2-2 日本人の身長の高長期変化

注：石垣島、港川人（沖縄）を除き関東出土の人骨による。ただし、大正時代以降は20歳計測データ（文部科学省・大学生、現代のみ厚生労働省・国民）。石垣島（2万7000年前）、港川人（2万2000年前）と縄文人以降との人種的つながりは不明。

資料：鈴木隆雄（1996）『日本人のからだ 健康・身体データ集』（朝倉書店）、石垣島は毎日新聞2017年5月20日、現代は厚生労働省「国民健康・栄養調査」

伸びが著しかったのは韓国である。それにしても韓国の身長が今や中国、日本を抜いてアジア圏トップにまで至っているのは、上述のオランダと同じように北方民族の素地があらわれてきているためと見てよいのではなからうか。

日本が韓国や中国を下回るに至っているのは経済発展の先行による栄養上の優位性が失われ、もともとの南方民族の素地があらわれてきた可能性もあろう。

つまり、世界的に経済格差やそれによる栄養状態の格差が縮まったため、むしろ、もとの遺伝的な素地による差が目立つようになってきたというのが、後進国における戦後の急速な伸びや先進国における最近の横ばい化と並ぶもうひとつの世界全体的な身長傾向なのだろう。

少なくとも歴史時代には移民や征服に伴う大きな民族構成の変化を経なかったにもかかわらず、日本人が自らの置かれた明治以降の時代的な状況変化に対応してめざましい身長変化を遂げてきた点そのものに、世界の中でもまれな日本人独特の適応能力の高さがあらわれているといえよう。適応能力の高さは日本人の実力のひとつであり、戦後、新憲法の下でそれまでと180度異なる平和国家として生まれ変わり、経済や厚生、文化の面で大きく発展することができたのもそのあらわれと言ってもよいだろう。

【補論】馬鹿みたいに背が高かった米国人

19世紀以前の米国人の背の高さが世界の中でも驚異的だった理由としては、もともとの宗主国^{そうしゅこく}であつた英国人の身長が相対的に高かつた点やインディアンとの雑種強勢なども考えられるが、やはり食生活によるところが大きかつたといえる。ジャック・アタリ『食の歴史』（プレジデント社、原著2019年）は次のように指摘している。

アメリカの入植者がイギリスに反旗^{はんき}を翻^{ひるがえ}したとき、アメリカの入植者の栄養状態はイギリス人よりもはるかによかつた。アメリカの兵士は味方のフランスや敵のイギリスの兵士よりも頑強な体格だったのだ。1793年にフィラデルフィアの医師ジョン・ベルは、初期のアメリカ人は「大食漢^{あふ}だった。というのは、彼らの周りには、豚、牛、野菜、トウモロコシなど、食物が溢^{あふ}れていたからだ」と記している。（132頁）

ジョン・フォード監督、ジョン・ウェイン、ジェームズ・ステュアート出演の西部劇映

画『リバティ・バランスを射った男』（1962年）の中では、西部の田舎町の食堂で農民の客たちが次々とステーキをウェルダンを注文して食べるシーンが印象深く描かれているが、そのステーキのおどろくべき巨大さを見るとこの点が思い出される（画像は食堂の料理人がステーキ肉を取り出してフライパンで焼こうとしているシーン）。



『リバティ・バランスを射った男』のワンシーン

ペリー提督を實見した菅野八郎かんの はちろうは、身長を大谷翔平選手並みの六尺四、五寸（約192.5cm）と記録しているそうであるが、当時の米国人の中でも長身だったと言えよう。ただし、当時の米国人の平均身長と現代日本の平均身長はほぼ同等なので、あり得ない水準でもなからう。

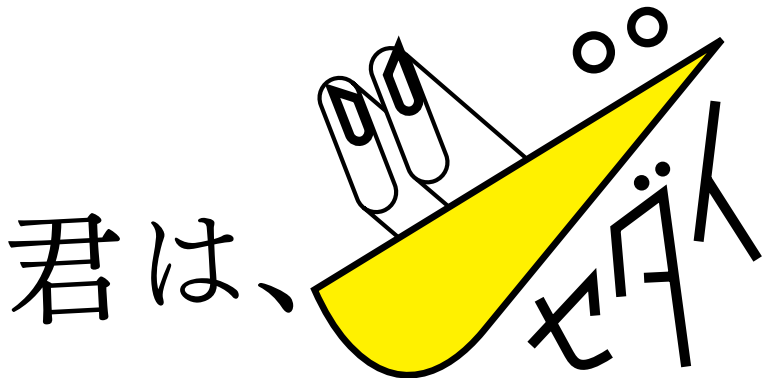
1-3 働き者の日本人…かつては労働時間、今は高齢就業

労働時間が日米逆転、また日本とヨーロッパとの労働時間差は縮小

日本人の適応能力の高さは、働き方の変化にもあらわれている。かつて労働時間の長さで知られていたが、今では、労働時間の長さはそう目立たなくなり、むしろ高齢就業率の高さで目立つ国になっている。

まず、労働時間の推移を他の先進国と比較してみよう。

関心が高い労働時間の国際比較については、OECDの労働白書ともいうべきOECD



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!